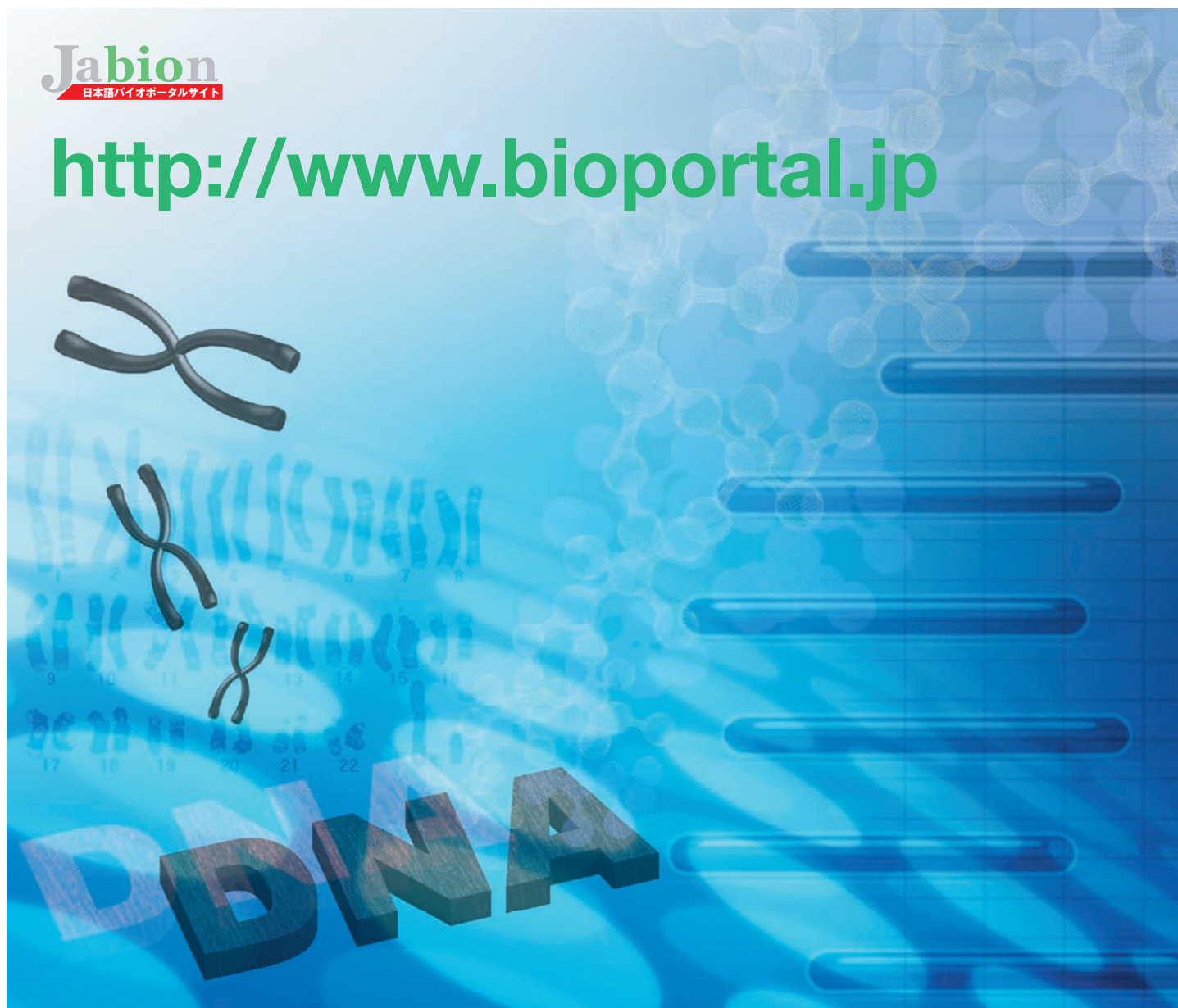


国立情報学研究所ニュース

No.35 March 2007 平成19年3月

Jabion
日本語バイオポータルサイト

<http://www.bioportal.jp>



日本語バイオポータルJabion

- 1 研究活動 〈研究活動〉学びながら行動するロボット／〈研究活動〉光アクセスサービスの競争を評価する／NII研究員紹介／外国人研究員紹介／リンデンバウム客員助教授による連続講義／「ドイツ研究協会 (DFG) コンピュータシステム委員会と国立情報学研究所における研究交流に関するワークショップ」を開催 (11月10日)／11th Annual Asian Computing Science Conference (ASIAN 2006)／分野横断型シンポジウム「[[融合知]創成への挑戦]
- 5 大学院教育 大学院生紹介／総合研究大学院大学情報学専攻入試説明会
- 6 事業活動 図書館のスタッフ・ディベロップメントに関する国際シンポジウムを開催／日本研究情報専門家研修への協力／次世代学術情報ネットワーク (SINET3)の構築について／第8回図書館総合展フォーラム「TRANSFER-出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」の開催／「デジタル巨人の肩の上に立つ」国際シンポジウム開催報告／EAJRS年次総会への出席／SC06にNAREGIブースを出展／米国TeraGrid視察報告／米国での認証基盤調査／実務研修者紹介／平成18年度教育研修事業の開催報告
- 12 トピックス 図書館総合展への出展／第6回軽井沢土曜懇話会 (10月28日)／第7回軽井沢土曜懇話会 (11月11日)／市民講座「8語で談じる情報学」第6回 (11月14日)／市民講座「8語で談じる情報学」第7回 (1月16日)／市民講座「8語で談じる情報学」第8回 (2月14日)／知財だより

●NII掲示板

学びながら行動するロボット

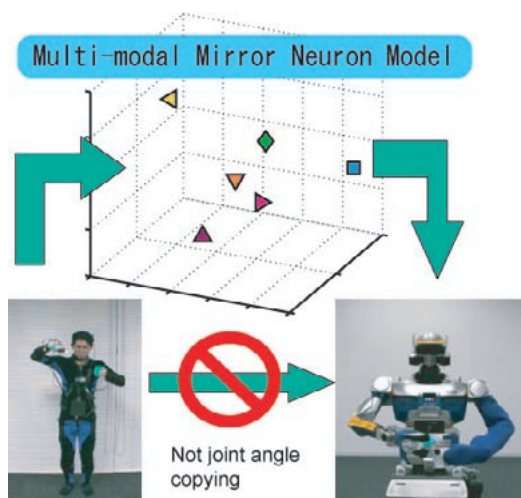
研究紹介

近年、ロボットに日常生活で人間を支援するような働きをさせる取り組みが行われている。その中で最も困難な課題の1つに、ロボットをどのように新しい環境になじませるか、という問題がある。従来のロボットのデモでは、あらかじめ決められた環境、道具、状況、判断がプログラムの形で与えられており、その通りに事を運んで行く例がほとんどであった。しかし、次世代のロボットを考えた場合、あらかじめ日常の生活空間の情報を埋め込むアプローチは考えられず、初めて出会った環境に対しては、周辺の人々に質問をしたり教えてもらったりしながら新しい環境になじんでいくというような、人間と同様に学習するプロセスを実行できる知能が求められている。

そこで、この研究では、開発者やプログラマーがロボットに何か特定の知識構造を埋め込むようなことはせず、その場その場の状況に応じて、動作パターンや判断の仕方をロボットに教示する対話などの経験を通じて、ロボットが段階的に行動を獲得して行くような、新しい知能の形態を目指している。そのために2つのアプローチによって研究を進めている。

(1) ミラーニューロンモデルによる行動模倣システム

ミラーニューロンは、他人の特定の行動を観測するときに発火し、自分が同じ行動を行おうとするときにも発火する脳の領域である。他人の身体と自分の身体の間を映す鏡のようなシステムであることから、ミラーニューロンと名付けられている。この部位は、脳の言語野の近くにあることから、ミラーニューロンは身体運動の認識・生成・抽象化・言語化を司る器官であるという仮説が立てられている。このミラーニューロンの挙動を工学的に実現したのが原始シンボル空間と呼ばれるモデルである。これを用いると、言語を使ったコミュニケーションによって動作模倣や動作伝達などが可能となる。時系列データを確率的なモデルで抽象化する手法である隠れマルコフモデル(HMM)を用いて動作パターンをパラメーターで表現し、そのHMM間の類似度を示す擬似的な距離を定義することで時系列運動パターンを空間上の静止点として配置することができる。この空間を用いることによって人間が行った動作をもとにヒューマノイド(ヒト型)ロボットの身体運動を再現することが可能になった。図はNII企画型共同研究により東京大学の稲



図：ミラーニューロンモデルによる行動修正・模倣
[東京大学稲葉雅幸教授とのNII企画型共同研究]

葉雅幸教授と進めている実験で、ロボットは人間のミスを検出して、本来おこなうべき行動を予測して実行することができるようになっている。

(2) ベイジアンネットワークによる「適応的対話戦略モデル」

人間からロボットに与えられる指示は曖昧なことが多く、また環境を探索した情報には不確実性が多く含まれているため、ロボットが実世界の状況に照らし合わせながら、指示された内容を正確に理解することは困難である。そこで、事象間の因果関係を確率的に表現するモデルであるベイジアンネットワークを用いて、命じられた作業の遂行に必要な知識構造を確率的に表現し、曖昧性や不確実性を伴った状況においても確率的推論によって、確信度の高い判断を行うことができるシステムを構築した。この確信度の分布を利用して、必要最小限の会話で曖昧性を解消させるために必要な質問文の生成、ユーザーとロボットの意図が食い違った場合の確認行為などを実現した。

以上の二つのアプローチを発展させながら、人間とロボットの間で質問・確認・指摘などの高度な対話行動を積み重ね、経験を知識に変換していきながら行動を発展させていくロボットの知能をつくり上げていきたいと考えている。

(情報学プリンシプル研究系 助教授 稲邑 哲也)

光アクセスサービスの競争を評価する

研究紹介

いま、日本では情報通信分野で世界に先駆けた競争が起きている。このような競争が将来までうまく働くかど

うかが重要な問題となる。従来の競争では、固定電話でも携帯電話でもADSLでも、NTTのネットワークを利

用した部分的な参入で、多くの新規事業者は比較的小さい規模の企業だった。しかし、光アクセスサービス(Fiber To The Home, FTTH)の競争では、大企業の電力系事業者やガス事業者の本格参入により新しい状況、つまり、ある分野では強く規制を受けている企業が別の分野では新規参入企業として優遇されている状態が出現した。しかも、既存のインフラを利用するような部分的な参入ではなく、自前でインフラを構築して代替サービスを提供し、ある程度のシェアを獲得している。つまり、光アクセス市場(NTT西日本とケイ・オプティコム[関西電力の子会社])では、電力市場(関西電力とエネット[NTTファシリティズ、東京ガス、および大阪ガスが出資])や都市ガス市場(大阪ガスと関西電力)と違い、電力市場で圧倒的なシェアを持つ事業者が光アクセス市場に直接・間接的に参入している。現在の状況を概観すると、図1ようになる。

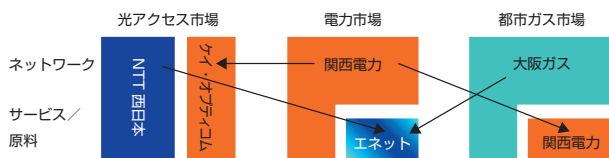


図1: 相互参入の例

いまのところ、競争が激しいので目立った弊害は出ていないが、情報通信事業については、新規参入企業を優遇する従来型の非対称規制や官庁が所管する事業ごとの

縦割り規制でいいのか、あらかじめ検討しておく必要がある。そこで、将来の具体的な市場や競争をモデル化することで、競争がうまく働くかどうか、あるいは社会全体の利益(=企業の利益+消費者の利益)がどのように変化していくかを検証した。

その結果、一部分への参入(部分参入)よりもすべてが1ヵ所ですむワンストップ型(垂直統合型)の参入の方が、社会全体の利益が大きいことが分かった。情報通信技術(ICT)産業では、モジュール化されたサービスをうまく組み合わせることで、最良の成果を探索しながら成長してきたといわれてきたが、情報通信産業のインフラ部分では必ずしもそうではないことがはっきりしてきたようである。

国民の選択肢を減らさないで、安心安全な情報通信インフラをいかに構築するか、情報通信政策の前提になるより良い実用的なモデルの構築に向けてさらに研究を進めていきたいと考えている。

[文献]

上田昌史、霜島朗子「光ブロードバンドの料金政策」, interplace #107 (2006)

Takanori Ida and Masashi Ueda: 'The Interconnection and Pricing of the Internet' M. Kagami, M. Tsuji, and E. Giovannetti (eds.), Information Technology Policy and the Digital Divide, Edwards Elgar: 282-302. (2004)

(情報社会相関研究系 助手 上田 昌史)

NII 研究員紹介

コンテンツ科学研究系 プロジェクト研究員

深川 大路 (ふかがわ だいじ)

本年度4月より、NIIのコンテンツ科学研究系にてプロジェクト研究員として研究に従事しております。

私の専門はアルゴリズムと計算に関する理論です。組合せ最適化問題に対するアルゴリズム、すなわち計算機に効率良く計算をさせるための手法に興味があり、その中でも構造を持つデータ、特にグラフや木と呼ばれるデータ構造に対するアルゴリズムに興味があります。大学院ではバイオインフォマティクスを専門とし、構造を持つデータに対する様々なアルゴリズムの開発と解析に携わってきました。

本年度から文部科学省の特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の研究」における計画研究の一つであり、本研究所の安達淳教授が代表者を務めておられる「情報爆発時代の情報検索基盤技術」において雇用され、高須淳宏教授のご指導の下、NIIで研究に従事しております。この計画研究では、主にインターネット上で公開される各種テキストや個人・組織が管理する文書を対象として、関



連する情報を結び付ける「情報リンケージ」プラットフォームの実現に向けた研究に取り組んでいます。

構造を含むデータを対象とするデータマイニングは近年非常に注目されている分野の一つであり、インターネット上の文書やその他のメタデータ、あるいは書誌データなどの学術情報等の記述に広く用いられているフォーマットであるXMLをはじめとして、応用面でも期待の集まる研究であると考えています。また計算量理論やグラフ理論においてもグラフアルゴリズムの分野は近年ますます重要な位置を占めてきているエキサイティングな分野です。このNIIにおいて良い成果を挙げるができるように努めたいと思います。



外国人研究員紹介

アーキテクチャ科学研究系 プロジェクト研究員

Duval Sebastien

(デュヴァル・セバスティアン)

2001年	ソフトウェア工学修士号-EMN(ナント鉱山大学校)、フランス
2002年	バーチャルリアリティ/複合システム修士号-INSTN(国立原子力科学技術高等学院)、フランス
2002年	ヴァーチャルリアリティ・プロジェクト・マネジメント修士号(最優秀)-ISTIA(アンジェ工科大学)/ラヴァル、フランス
2006年	情報科学博士号-総合研究大学院大学、日本

私はフランスで情報科学を修めたのち、ロボット工学やユビキタスコンピューティング、バーチャルリアリティの最新技術を学ぶため日本へ留学しました。自由な研究環境のなかで、心理学と情報科学を組み合わせる方法論を開拓し、新しいシステム構築に有用な成果をあげることができたと考えます。

NIIに来る前に一度、東京工業大学の研修生として佐藤教授のもとに短期留学し、その「SPIDAR」というデバイスの応用研究をしました。さらにぜひ日本で研究を続けたいと思い、NIIのアドレス助教授に相談したところ、総合研究大学院大学を紹介されました。幸い入学を許され、当研究所の橋爪教授のもとで3年間、博士課程の研究をしました。この間、フランス外務省(ラヴォワジエ奨学金)やUFJ銀行(川嶋章司記念スカラシップ基金)より奨学金を受けることができました。

博士論文は「ウェアラブルコンピュータで日常生活の基本的欲求を満たす-帰属欲求の場合」というものです。これはウェアラブルコンピュータの応用領域を広げ、より有益で使いやすい、広く受け入れられるシステムの構築を目的としています。研究で欠かせないのは大規模なユーザの心理調査でした。



データはインタビュー、アンケート、実験で収集しました。実験においては、写真を見て感じる一般的な興味、心理的シグナルの冷静/興奮度を評価し、初対面の「出会い」をスムーズに進めるウェアラブルアシストシステムを構築しました。NIIのMOU(海外の協力研究所)プログラムを通じて、シアトルのワシントン大学のウェゴースト博士のもとにも数ヶ月留学し、貴重な経験をえました。ウェアラブルコンピューティング研究に心理学的手法を取り入れることで、生活の質を向上させ、このコンピュータの利用を促進することを示せたと考えます。また、その副産物として、文化的比較によりフランス人と日本人のコンピュータに対する興味の持ち方の違いも明らかにできました。

卒業後、私はNIIのプロジェクト研究員として残ることになり、ユビキタスコンピューティングの応用研究を発展させています。特に一般家庭に持ち込む研究に力点をしています。このようなシステム設計で問題となる重要事項にプライバシーがありますが、そのためにクリスチャン・ベッカー教授(独ビーレフェルト大学)との共同研究も始めました。プロトタイプシステムを開発中ですが、これは家庭内のコミュニケーションの向上と感情的結びつきを強めることを目標としています。システム構成で特に考慮しているのは、ユーザの感情の評価、家族への伝達方法、ウェアラブルデバイス上での視覚化方法、インタラクションの管理などです。日本、フランス、ドイツ、アメリカなど諸国で使うことで、その国民の精神・社会的要因を明確にできれば面白いと考えています。

リンデンバウム客員助教授による連続講義

平成18年10月に、イスラエル工科大学(Technion)のミヒャエル・リンデンバウム博士が、本研究所の客員助教授として来日され、「Analysis of Vision Algorithms(ビジョナルゴリズムの解析)」というテーマで3回の連続講義を行い、講義は公開講座として一般の方にも公開されました。リンデンバウム博士の研究は、画像処理とコンピュータ・ビジョン(特にビジュアルタスクの統計解

析)であり、今回は、ビジョナルゴリズムの解析について「ガウシアンランダムフィールドにおけるサンプリングと選択」、「グルーピングプロセスの確率論的解析」、「オブジェクト認識の信頼性推定」と大変興味深い内容の講義となりました。所内外の研究者、学生が多数参加し、活発な議論が行われました。



(国際課)

「ドイツ研究協会 (DFG) コンピュータシステム委員会と国立情報学研究所における研究交流に関するワークショップ」を開催

平成18年11月10日(金)に国立情報学研究所(NII)において、ドイツの学術研究支援機関であるドイツ研究協会(DFG: German Research Foundation)のコンピュータシステム委員会と本研究所における研究交流に関するワークショップを開催しました。坂内所長から挨拶の後、安達教授からNIIの活動について、knobloch博士からDFGの活動について説明が行われました。また、NII

からはネットワーク基盤整備やNAREGIプロジェクト、DFGからはアーヘン工科大学におけるコンピュータサイエンスの活動、ドレスデン工科大学及びミュンヘン工科大学における研究活動の報告がありました。その他、NIIでの研究活動及び国際活動について説明を行い、各研究者より活発な議論が行われ、今後の研究展開が期待されます。



knobloch博士

(国際課)

11th Annual Asian Computing Science Conference (ASIAN 2006)

平成18年12月6～8日の3日間、学術総合センターにおいて、標記の国際学会が開催されました。本会議は、国立情報学研究所、在日フランス大使館、INRIAおよび慶応義塾大学の共催であり、セキュリティに関するソフトウェアの理論ならびに実践に関する研究成果を議論するものです。ASIANは、1995年以来、毎年

アジア各国で開催されている国際会議で、本年度11回目となります。3日間の会議では、アジアとヨーロッパを中心に13の国・地域から27件の一般講演があり、国内外から約80名が参加しました。また、3名の招待講演者、Li Gong博士(Microsoft China)、John Mitchell教授(Stanford University)、Patrick Cousot教授(Ecole

研究活動

Normal Superieure) から、ビジネス面から理論的な基礎に立つソフトウェア技術まで幅広い内容を聞くことができました。来年はカタールで開催されるとのことです。

(アーキテクチャ科学研究系 教授 中島 震)



分野横断型シンポジウム『「融合知」創成への挑戦』

平成 18 年 11 月 13 日、新領域融合研究プロジェクト「分野横断型」シンポジウム『「融合知」創成への挑戦』を学術総合センター 2 階で開催した。

「分野横断型」は、情報・システム研究機構新領域融合研究センターが推進する融合研究プロジェクトのうち、国立情報学研究所が中心となって推進しているもので、「生命」、「地球」、「統計数理」、「情報」の 4 分野横断型の融合研究を推進する情報空間・情報基盤の確立を目指し、3 つのサブプロジェクトから構成されている。

シンポジウムは、プロジェクトリーダーである東倉洋

一副所長からプロジェクトの概要説明があり、続いて各サブプロジェクトリーダー（高野明彦教授、藤山秋佐夫教授、新井紀子教授）より研究についての講演があった。その後、サブプロジェクトごとのブースに分かれて、ポスターセッションとデモンストレーションを行った。当日は、民間企業や大学等から 120 名を超す参加者があり、活発な質疑応答が行われ、たいへん有意義なシンポジウムとなった。

(研究協力課)

大学院教育

大学院生 紹介

Md. Nurul Huda

(ムハマド・ヌルル・フダ)

1995 年 ダッカ大学(バングラデシュ)で理学士号取得
1997 年 ダッカ大学(バングラデシュ)で理学修士号取得
現在、総合研究大学院大学(総研大)国立情報学研究所(NII)で、
情報学博士課程在学中



私はバングラデシュのダッカ大学において、1995 年と 1997 年に、それぞれ理学士号と理学修士号を取得しました。1997 年、IT 部門の役員としてベキシムコ社に入社しました。1998 年にコミラ大学に移り、講師を務めました。2000 年からはダッカ大学で教員を務めています。2004 年 4 月、東京の総合研究大学院大学(総研大)国立情報学研究所(NII)に入学し、NII 奨学金を受けながら、情報学博士課程を履修しています。興味のある研究分野は、ワイヤレスネットワークおよびアドホックネットワーク用ルーティングプロトコル、ソフトウェアエージェント、マルチパーティ・コンピューションの問題におけるプライバシー保護、プライバシーを保護したデータマイニングなどです。

私は、寿命予測に基づくコスト効率に優れたルーティングプロトコル「CLPR」を提案しました。これはネットワーク寿命を最大化し、電力コストを最小化する試みです。CLPR は、ネットワーク寿命とルーティングコストを考慮に入れたパス効率の向上と高いパケット送信率を実現し、ネットワークの安定性をもたらします。

私は、プライバシー流出を定量的に測定する、マルチパーティ・コンピューション用のプライバシー流出モデルと、「Min プライバシー・メトリック」というまったく新しいプライバシー用メトリックを考案しました。また、モバイルエージェントベースのスケジューリングスキーム「EPMS」を提案しました。EPMS はコンピューションの複雑さを抑える

大学院教育

ことにより、必要とされる最適レベルに近いグローバルユーティリティを実現し、コンピューションスペースの共用により、より強固なプライバシー保護を達成します。最後に忘れてならないのは、マルチパーティ・コンピューションでの問題解決時のプライバシー保護を目的とした、エージェント向けサーバープラットフォームのセキュリティシステム「iCOP」を提案したことです。iCOPは従来の(非暗

号化の)アルゴリズムを使用できるにもかかわらず、数多くの問題解決にあたって、非常にすぐれたプライバシー保護機能を実現します。また、ほんのわずかな計算時間の増加により、完全なプライバシー保護を提供することが可能です。

今後の研究活動では、考案したiCOPモデルを拡大し、多彩なeコマース向けアプリケーションに対応したいと考えています。

総合研究大学院大学情報学専攻入試説明会

総合研究大学院大学情報学専攻では、平成18年11月13日(月)、研究所内において平成19年4月入学(博士後期課程及び5年一貫制博士課程)のための入試説明会を開催しました。

説明会には15名の参加者があり、速水専攻長及び米田教授による説明、本専攻修了生の山田太造プロジェクト研究員ならびに社会人学生及び一般学生による学生生活の紹介に熱心に耳を傾けていました。また、大学院生研究室、講義室、情報資料センター等の所内見学を行った後、希望者への個別相談会を実施し、速水専攻長、米田教授、武田教授及び古山助教授が熱心な相談に対応しました。

なお、当日参加できなかった方のため、当日の説明内容のビデオ及び資料を本専攻のホームページに掲載しま



した。

http://www.nii.ac.jp/graduate_event/index-j.shtml
(研究協力課)

事業活動

図書館のスタッフ・ディベロップメントに関する国際シンポジウムを開催

NIIは教育研修事業の一環として、広島大学図書館、大阪大学附属図書館、東北大学附属図書館との共催、国立大学図書館協会の後援により、国際シンポジウム「求められる図書館サービスとスタッフ・ディベロップメント(Library Services to be expected and Staff Development)」を、11月14日・広島大学、15日・大阪大学、17日・東北大学の3会場で開催しました。

大学及び図書館を取り巻く急激な環境変化に伴い人材の育成が急務となっている今日、わが国で知られる機会の少ない北欧やオセアニアにおける大学図書館のスタッフ・ディベロップメントの現状について知見を得ると共に、わが国の課題解決に向けた行動へ繋ぐよう議論を深



めることを目的としたもので、ウプサラ大学(スウェーデン)、フリンダース大学(オーストラリア)及びオーク

ランド大学(ニュージーランド)から現職のライブラリアンを講師として招き、講演とパネルディスカッションを行いました。

3会場で合計約300名の参加があり、各国の積極的な人材育成活動に感銘を受ける一方、ベテラン司書の大量退職問題や学術情報メディアの急激な変容等、わが国にも共通する問題への取り組みも報告されました。パネルディスカッションでは、講師と参加者との間で活発な意

見交換がなされ、学術情報基盤の安定的確立の基礎である「大学図書館の人材育成と確保」が国公立の枠を超えた課題となっていることが実感されました。

本シンポジウムの講演資料は、広島大学学術情報リポジトリ“HIR”に収録されており、NIIのウェブサイトからもアクセスできます。

<http://www.nii.ac.jp/hrd/sympo2006/>

(企画調整課)

日本研究情報専門家研修への協力

国際交流基金・国立国会図書館主催、本研究所協力により「日本研究情報専門家研修」が平成18年11月27日から12月15日までの3週間に渡り実施されました。研修には、海外の大学等の日本研究等情報を扱う司書など、11カ国から12名が参加し、日本関係の情報やサービスの知識・技術について行われました。

この一環として、11月29日に本研究所を会場として、CSI事業、コンテンツ・サービス、海外機関との連携、海外からの利用方法を含め説明及び実習を行い、参加者からは、熱心な質問が上がっていました。関連して、目録システム参加機関からの参加者3名を対象として、12月18日に併設目録システム講習会を行いました。



(国際課・企画調整課)

次世代学術情報ネットワーク(SINET3)の構築について

NIIでは、大学等と連携を図りつつ我が国の「最先端学術情報基盤(Cyber Science Infrastructure: CSI)」構築を推進していますが、このCSIの中核を担うのが、次世代学術情報ネットワーク(SINET3)です。

SINET3の構築にあたっては、利用者へのアンケート調査や海外研究ネットワークの動向調査等を実施し、学術情報ネットワーク運営・連携本部で基本計画を策定しました。現在、次のような基本コンセプトのもとでネットワーク設計及び構築作業を進めています。

1. 既存のSINETとスーパーSINETを統合し、シームレスなネットワークとするとともに、新しいネットワークアーキテクチャ(光IPハイブリッドアーキテクチャ)の採用により、大容量トラフィックをより効率よく柔軟に転送できるようにする。
2. IPルータ等の大容量通信機器は、通信事業者のデータセンターに設置するとともに、データセンター間を接続するバックボーン部分を複数ループとするなど、災害及び障害に強く信頼性の高いネットワーク構成とする。
3. バックボーンの回線速度を10Gbps～40Gbps、ノードの回線速度を1Gbps～20Gbpsとし、先端的な研究分野及び研究機関等で取り扱われる大容量トラ

フィックにも耐えうる我が国最大の超高速ネットワークを提供する。

4. 先進的な通信機器とネットワーク技術を導入することによって、効率的なネットワーク運用を実現するとともに、マルチレイヤサービス、マルチVPNサービス、マルチQoSサービス、帯域オンデマンドサービス、及びトラフィック情報提供サービス等、ネットワークサービスの充実・強化を図る。
5. 海外の研究情報ネットワークと連携し、国際的な学術情報基盤の一翼を担える世界的レベルのネットワークとする。

平成19年4月から5月末にかけて、順次、既存のSINET及びスーパーSINETをSINET3に切り換えて行く予定です。切り換えの際は、局所的にネットワークの一時停止が生じますが、極力、最小限かつ短時間にとどめるように努めますので、ご理解とご協力をお願いします。

SINET3の構築スケジュールや各種サービスの提供開始時期については、順次SINETウェブサイトでご覧いただけます。

<http://www.sinet.ad.jp>

(学術ネットワーク研究開発センター・ネットワークグループ、ネットワーク課)

第8回図書館総合展フォーラム「TRANSFER-出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」の開催

国際学術情報流通基盤整備事業 (SPARC Japan) の広報・人材育成の一環として、第8回図書館総合展 (11月20日～11月22日) において、UKSG (United Kingdom Serials Group: 英国逐次刊行物グループ) と共に、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会、Blackwell Publishing の後援を得て、標記講演会を11月20日に開催しました。

今回は、UKSGの下に設置されたTRANSFERプロジェクトのChairであるNancy Buckley氏を招へいし、出版社間ジャーナル移行問題の背景、プロジェクトの目的と進捗状況、及び今後の展望について報告いただきました。当日は、大学図書館や学術出版の関係者約70名の参加を得て、この問題が各ステークホルダーに及ぼす影響等について、熱心な議論が行われました。

なお、この講演会の詳細や当日の資料は、国際学術情報流通基盤整備事業ウェブサイトの「イベント案内」のページで公開しています。



<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/>

(コンテンツ課)

「デジタル巨人の肩の上に立つ」国際シンポジウム開催報告

国立情報学研究所学術コンテンツ運営・連携本部は、平成18年12月18日から19日の2日間、文部科学省、日本学術会議、国立国会図書館、科学技術振興機構、国立大学図書館協会、公立大学協会図書館協議会、私立大学図書館協会の後援を得て、標記シンポジウムを都市センターホテルで開催しました。

今回のシンポジウムでは、サブタイトルを「機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム」と題し、現在進展・拡大しているデジタル情報環境下において、学術コミュニケーションが今後どのように展開していくのかを議論するため、カリフォルニア大学学術情報サービス担当副事務総長補ダニエル・グリーンズティーン氏を始め国内外の有識者9名の方を招へいし、さまざまな話題を提供いただきました。

当日は、大学図書館や学術出版、学術情報システムの関係者、各分野の研究者、合わせて290名が参加し、講演者を含めて、活発な議論が展開されました。



なお、本シンポジウムの詳細や当日の資料は、以下のウェブサイトで公開しています。

<http://www.nii.ac.jp/irp/symposium2006/>

(コンテンツ課)

EAJRS年次総会への出席

平成18年9月27日から30日まで、イタリア・ヴェネツィアにおいてEAJRS (European Association of Japanese resource specialists: 日本資料専門家欧州協会) 年次総会が開催され、NIIからは宮澤彰情報社会相関研究系教授、コンテンツ課の阿藤品学術ポータル係長、斎藤目録情報係員が出席しました。

EAJRS は、欧州の日本研究者の情報交換及び日本情報の入手促進を目的とした協会です。年次総会には10数か国約70名の参加がありました。

今回は、参加研究者・研究機関の活動内容を紹介し意

見を交換する一連のプログラムに参加し、「国立情報学研究所における学術情報の提供」と題して、機関リポジトリ構築支援事業、GeNii、NACSIS-CAT/ILLについてのプレゼンテーションを行いました。特に機関リポジトリ構築支援事業について、欧州の日本研究者に対して理解を広げる貴重な機会となりました。

EAJRS ホームページ

<http://japanologie.arts.kuleuven.be/eajrs/>

(コンテンツ課)

SC06にNAREGIブースを出展

平成18年11月11日から17日まで米国タンパコンベンションセンターにて開催されたSC06(高性能コンピュータ・ネットワーク分野の国際会議)に、リサーチグリッド研究開発センターがNAREGIブースを出展しました。

ブースでは、NAREGIミドルウェアの概要説明、利用方法および海外のグリッドグループとの連携などのパネルを展示しました。また、現在開発中のNAREGIミドルウェアβ2のデモンストレーションでは、リサーチグリッド研究開発センターを始めとした複数の機関のコンピュータを実際に使用して、計算処理を実行する様子やデータ共有する様子などを実際にご覧いただきました。

SC06全体の参加者は7000名を越え、NAREGIブースへも多くの方が訪れて、有益な意見交換を行うことができました。



(企画調整課)

米国TeraGrid視察報告

国立情報学研究所学術情報ネットワーク運営・連携本部グリッド作業部会では、日本の研究環境に必要なグリッドミドルウェアを導入し、学術情報基盤として運用する方策について検討し、運用に至るまでの全体調整を行う役割を担っています。

海外では、米国のTeraGrid、欧州のEGEEなど、既にグリッドミドルウェアを研究基盤として運用している事例があります。日本のグリッド基盤構築の参考とするため、グリッド作業部会委員を中心とした25名が、平成18年11月20日から21日の2日間、米国のNFSが運用するTeraGridを視察しました。

初日は、TeraGridの資源センターでもあるNCSAを訪れました。NCSAでは、TeraGridの資源管理や資源配分のポリシー、システム運用について説明を受け、NCSA

の資源はTeraGridの資源として無料で利用可能であること、ユーザサポートが24時間体制であることなど、米国の体制やスタッフの充実ぶりを目の当たりにしました。

2日目は、TeraGrid全体のオペレーションを統括するアルゴンヌ国立研究所(ANL)を訪れました。ANLでは、TeraGridの現状と将来計画、Globusの最新情報、今後導入予定のスパコンなどについて説明を受け、NII側からはNAREGIグリッドミドルウェアの概要説明などを行うなど、グリッド基盤構築に関する情報交換を行いました。

今回は、2日間の慌ただしい行程でしたが、米国でのグリッド運用について最新の技術情報が得られるだけでなく、海外機関とのグリッド連携を進めていくための情報交換ができるなど、大変充実した視察となりました。

(企画調整課)

米国での認証基盤調査

NIIでは、学術情報ネットワーク運営・連携本部認証作業部会を中心として、大学間連携のための全国共同電子認証基盤(UPKI: University Public Key Infrastructure)の構築を推進しています。

UPKI構築の参考とするため、公開鍵基盤(PKI)を7年前より本格的に研究・利用している米国ウィスコンシン大学に、平成18年11月10日から11日の2日間、認証作業部会の関係者を中心とした25名が訪問しました。

ウィスコンシン大学では、キース・ハイゼルトン教授(シニアITアーキテクト)を始めとした米国の大学で認証基盤構築に関わる研究者から、認証のソフトウェ



アである Shibboleth や ウィスコンシン大学等の米国の大学における認証基盤構築の状況について説明を受けました。また、日本側からは、参加した各大学の認証基盤構築の取り組みや、無線LANローミングの実施状況、NAREGI-CAの開発について説明を行い、大学における認証基盤構築のための情報交換を行いました。

UPKIの事業はスタートしたばかりですが、先行する米国の大学も多くの困難を克服して認証基盤の構築を進めていることが分かりました。これらの知見を、今後のUPKI構築に生かしていきます。

(企画調整課)

NII 実務研修者紹介

NIIでは、教育研修事業の一環として、実務研修の制度を設けています。大学等の職員がNIIにおいて数か月間、実務を経験することにより、学術情報流通基盤の構築に向けた企画・立案・実施の手法等

を学びます。修了後は、所属機関等において研修の成果を生かした活躍が期待されます。

平成18年度は、3名の実務研修生を受け入れています。今号はそのうちの2名をご紹介します。

永井 伸 (ながい しん)

所属機関：東北大学附属図書館総務課情報企画係
研修期間：平成18年8月1日～平成18年12月15日
配属課係：開発・事業部企画調整課研修係

私は東北大学附属図書館で勤務していますが、日々進歩する技術やサービスの中で、果たして自分のやっていることがこれでいいのかと、とまどうことも少なくありません。そんな時、必要なスキルを身につけ日常業務に役立てられるのはもちろん、同じ境遇の仲間との交流を通して、様々な考え方を吸収できる研修・講習会の機会は大変貴重です。

NIIでは大学等の図書館職員向けに研修・講習会を行っており、私は研修生として、その企画や実施に携わっています。カリキュラムの作成や講師の検討といった企画では、今図書館員に必要なスキル

は何なのか頭を痛め、研修会場ではスムーズに進行するように気を使い、となかなか気を抜けない毎日ですが、NIIの職員の皆さんにいろいろ教わりながら経験を積んでいます。



図書館が蓄積してきた資料や技術を永く引き継いでいくためにも、NIIだけでなく大学や地区で研修を積極的に行う必要があると思います。東北大学に戻ってからは実務研修中に学んだことを活かし、東北地区における研修のレベルアップや受講機会の拡充に取組みたいと考えています。

(平成18年12月8日 記)

新妻 聡 (にいづま あきら)

所属機関：東北大学情報部情報基盤課ネットワーク係
研修期間：平成18年12月21日～平成19年3月30日
配属課係：開発・事業部ネットワーク課計画係

私は、東北大学情報部情報基盤課ネットワーク係で勤務しています。私の仕事は、学内ネットワークの管理・運用です。主に、教員や大学院生が利用するメールサーバの維持管理、ネットワークの運用を向上させるためのシステム開発に携わっています。このような業務を通してネットワークの知識や技術の向上に努めていますが、幸か不幸か東北大学の学内ネットワークは安定しているため、障害対応等の経験がなかなかできません。また、ネットワークの構築についても未経験です。このような状況の中で、東北大学の次期学内ネットワーク計画が進められて

おり、私もその一員となっています。

幸いにも、現在、国立情報学研究所が次世代学術情報ネットワーク(SINET3)の構築を進めていることを知り、実務研修生としてそ



のSINET3の構築を経験したい、と思いました。SINET3と学内ネットワークでは、規模や運用体制等に異なる部分があるとは思いますが、今回の実務研修をとおして、少しでもネットワークの構築作業や運用方法を学び、東北大学の次期学内ネットワークの構築と運用に生かしたいと考えています。

(平成19年1月18日 記)

平成18年度教育研修事業の開催報告

平成18年度の教育研修事業として、各種講習会・研修を計12コース48回開催し、約1,200名の受講がありました。

【講習会】

目録所在情報サービス業務担当者を対象に、総合目録データベースの内容やデータ登録の考え方の修得を目的として実施しています。

大学図書館のご協力を得て、各地区の開催を昨年度より増やすことができました。

講習会名	会場	受講者数	応募者数	回数
目録システム講習会(図書コース)	NII	173	241	5
	大学図書館	202	264	11
入力業務等請負業者対象 日本研究情報専門家研修併設	NII	23	26	1
	NII	3	3	1
目録システム講習会(雑誌コース)	NII	102	192	3
	大学図書館	110	132	4
ILLシステム講習会	NII	104	190	3
	大学図書館	15	27	1

【専門研修】

学術研究活動支援の中核的役割を担う職員を養成するための知識や技術修得を目的として実施しています。学術ポータル担当者研修のサブテーマを「機関リポジトリ構築」とし、構築の企画立案等に係る内容に特化するなど、常に各研修のカリキュラムの見直しを行っています。

研修名	会場	受講者数	応募者数	回数
総合目録データベース実務研修	NII	16	24	1
学術ポータル担当者研修	名古屋大学/NII	72	136	2
学術情報リテラシー教育担当者研修	大阪大学/NII	108	133	2
大学図書館職員講習会	京都大学/東京大学	82	85	2
情報処理軽井沢セミナー	NII軽井沢国際高等 セミナーハウス	8	12	1
情報セキュリティ担当者研修	東京/大阪	53	60	2
ネットワークセキュリティ担当者研修	東京/大阪	40	73	2
ネットワーク管理担当者研修	東京/大阪	80	104	4

【国立情報学研究所実務研修】

大学等の職員がNIIの実務を数か月間経験することにより、高度な学術情報システムの環境に対応しうる知識と技術を修得することを目的として実施しています。

研修員	期間	研修テーマ
三瓶 由紀子(北海道大学附属図書館)	H18.7.3～H18.9.29	目録システムにおける視聴覚資料の取扱い検討
永井 伸(東北大学附属図書館)	H18.8.1～H18.12.15	図書館職員向け研修の企画・運営
新妻 聡(東北大学情報部情報基盤課)	H18.12.21～H19.3.30	学術ネットワーク構築の企画・運用

【その他、外部機関との連携による事業】

- ・大学との共催による、人材育成関連の国際シンポジウムの開催
- ・NIIの各サービスに関して各機関が独自に実施する説明会等への教材提供・利用者番号貸与等の支援
- ・外部機関が開催する各種研修

平成19年度研修事業の詳細は、各機関へお送りする「教育研修事業要綱」及びNII教育研修事業ウェブサイトでお知らせいたします。

<http://www.nii.ac.jp/hrd/>

(企画調整課)

図書館総合展への出展

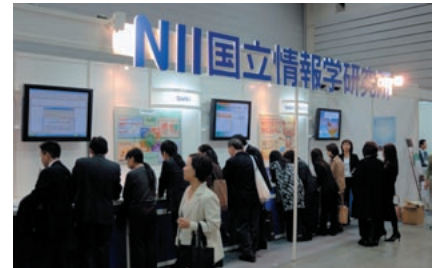
平成18年11月20日から22日の3日間、パシフィコ横浜において開催された第8回図書館総合展に出展しました。

図書館総合展は図書館に関わる様々な企業、関係者を集めて最新情報の提供と情報交換を目的として開催されています。

ブースではNACSIS-CAT/ILL(目録所在情報サービス)、GeNii(学術コンテンツ・ポータル)及び機関リポジトリを中心に紹介を行い、延べ約2万2千人の来場者のうち、2,200人余りの人に足を運んでいただきました。

また、11月20日には出展者プレゼンテーションとして「次世代学術コンテンツ基盤の実現：GeNii、NII-REO、そして機関リポジトリ」、フォーラムとして「TRANSFER：UKSG working group - The solution to transfer journals -」を開催しました。

(広報普及課)



平成18年度 国立情報学研究所 軽井沢土曜懇話会

軽井沢の国際高等セミナーハウスにおいて、10月28日(土)、11月11日(土)に平成18年度軽井沢土曜懇話会の第6回・第7回をそれぞれ開催しました。その講演の様子を紹介します。

第6回：平成18年10月28日(土) ヴァイオリンコンサート

Neue Bahnen (新しい道) —ヨハネス・ブラームスと朋友たち

ヴァイオリニスト **大津 純子**
 ピアニスト **岡田 知子**

昨年のプログラムは、ドイツ・ロマン派を代表する作曲家であり、評論家でもあったロバート・シューマン(1810～56)を中心に構成しましたが、今回は、そのシューマンに才能を見出されたヨハネス・ブラームス(1833～97)と、彼の朋友たちの作品を取り上げたいと思います。

1853年、『新音楽雑誌』(ライプチヒ)に掲載された<新しい道>と題するシューマンの評論で、“・・・新しい時代を表現する天才、「若き血」の突如の出現・・・”と絶賛されたブラームス。《ドイツ・レクイエム》に代表されるように、彼の作品は誇らしい愛国心と英雄的なドイツ主義、独自の宗教観にしっかりと根差しています。

彼はハンブルグに生まれ、その特出した音楽的才能は幼少より大きな注目を集めました。コントラバス奏者の父、ヨハン・ヤーコプからヴァイオリンとチェロの手ほどきを受けますが、音楽的表現の更なる可能性を求めてピアニストになることを選びます。10歳のときには父親が主催する室内楽演奏会で、ベートーヴェンの五重奏曲などのピアノ・パートを受け持つほどに上達し、当時のハンブルグ第一の作曲家・ピアニストであったE.マルクスゼンにピアノのほか、音楽理論と作曲を師事します。彼の厳格で、系統立てた



♪プログラム♪

- ドヴォルジャーク：
ヴァイオリンとピアノのためのソナティネ 作品100
- ヨハネス・ブラームス
アルベルト・ディートリッヒ：
ヴァイオリンとピアノのための F.A.E.ソナタ
ロバート・シューマン (J.ヨアヒムに捧ぐ)
- チプリアン・ポルムベシュク：バラード

教授法の下、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンを研究し、シューベルト、ショパンといった先達作曲家たちの価値を学び、ドイツ民謡に親しみ、変奏曲の本質を知ったことは、後のブラームスの大作曲家としての基盤を確固たるものとなりました。また、当時の一流青年ヴァイオリニスト、

ヨーゼフ・ヨアヒム (1831～1907) と知り合い、彼からシューマン夫妻を紹介されたことが、ブラームスのキャリアを大きく後押しすることとなります。大成してからのブラームス

は新鋭作曲家、ドヴォルジャーク (1841～1904) の才能を高く評価し、彼を世に送り出すきっかけを作り、生涯にわたり親交が続きました。(当日の配布資料より)

(広報普及課)

第7回：平成18年11月11日 (土)

科学者の役割

産業技術総合研究所理事長 元東京大学総長

吉川 弘之

科学者の役割を考えるには、科学者とは何かを考えることから始める必要があるだろう。どんな仕事をしているのか、それを職業として考えるならどんな職業か、社会の中ではどのように位置づけられているのかなど。科学者と呼ばれる人たちが現れたのは決してそんなに古いことではないが、それらは時代によって変わり、今も変化している。従って科学者は、いま何をし、何ができるのかを慎重に考える必要がある。“いま”という時代は、持続性(サステナビリティ)という言葉で特徴付けられるが、それは科学の質的変化を意味しているのだから、この大きな変動の中にある科学者を考えることになる。

ここでは、科学者とは何かだけでなく、科学者の権利と責任、科学研究、科学者コミュニティーについて、そ



して一方、社会への科学的知識の浸透、社会での科学者の位置付け、社会から科学者への要請、科学者から社会への助言、などを考察しながら、科学の影響を強く受けて過去になかった状況を作り出した現代を概観し、その中で科学者の役割、それはかつてなく厳しくかつ明確な輪郭を与えられているが、それを考えることにする。(当日の配布資料より)

(広報普及課)

平成18年度 国立情報学研究所 市民講座「8語で談じる情報学」

第6回：2006年11月14日 (火)

映像メディア ～情報技術によって生まれる新しいメディアとは～

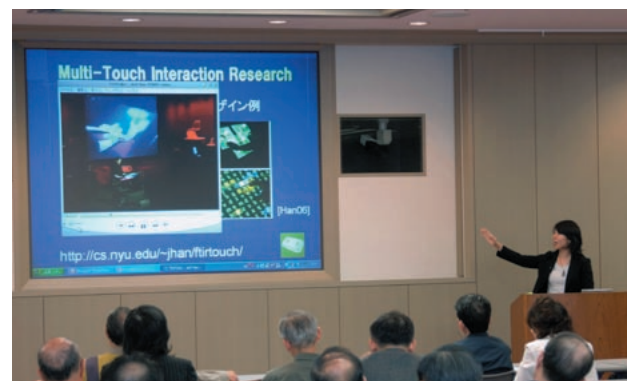
国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 助手 (当時)

佐藤 いまり (さとう いまり)

2005年 東京大学大学院学際情報学府大学院博士課程修了。学際情報学博士。現在、国立情報学研究所助手、科学技術振興機構さきがけ研究員。光源環境の推定、イメージ・ベースド・モデリング&レンダリングに関する研究に従事。

【専門分野】 コンピュータビジョン、コンピュータグラフィックス、イメージ・ベースド・モデリング・レンダリング 複合現実感

ビデオカメラ、プロジェクタといった映像機器の小型化・低価格化に伴い、映像を用いた情報処理技術は日常のさまざまな場面で利用され始めています。たとえば、私たちの生活基盤である日常空間へプロジェクタ投影を行うことにより、実空間そのものをコンピュータの表示デバイスとして用いたり、仮想のキーボードやマウスが机上に出現したり、日常生活を通してコンピュータ操作を行うというSF映画さながらのシナリオを実現する映像技術も提案されています。映像処理技術により実現さ



れる新しいコンピュータインターフェース技術や映像表示技術が私たちの生活をどのように豊かにしていくのでしょうか。今後の活躍が期待される情報処理技術について、これまでの研究事例を紹介しながら講演をいたしました。

(広報普及課)

第7回：2007年1月16日(火)

ユーザインタフェース ～人間が楽に使えるコンピュータとは～

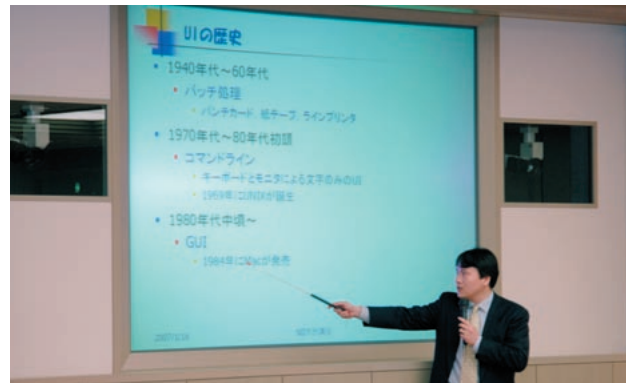
国立情報学研究所 アーキテクチャ科学研究系 助教授

細部 博史 (ほそべ ひろし)

1993年3月 東京大学 理学部 情報科学科 卒業
 1998年3月 東京大学 大学院理学系研究科 情報科学専攻 博士課程 修了
 1998年4月～1999年3月 日本学術振興会 特別研究員-PD
 (東京大学 大学院理学系研究科)
 1999年4月～2000年3月 学術情報センター 学術情報研究系 助手
 2000年4月～2004年1月15日 国立情報学研究所 ソフトウェア研究系 助手
 2004年1月16日～2006年3月
 国立情報学研究所 実証研究センター 助教授
 2004年4月～現在 筑波大学 先端学際領域研究センター 客員研究員
 2005年4月～現在 総合研究大学院大学 複合科学研究科 助教授(兼任)
 2005年5月～2005年7月 フランス ナント大学 計算機科学研究所
 客員教員
 2006年4月～現在 国立情報学研究所 アーキテクチャ科学研究系 助教授
 2006年4月～現在 早稲田大学 理工学術院 客員助教授(非常勤扱い)
 2006年4月～現在 文部科学省 研究振興局 学術調査官
 (科学研究費補助金担当)

【専門分野】 計算機科学

コンピュータは仕事、学業、娯楽などの様々な活動で利用されており、私達は普段の生活でいくつものコンピュータを使うようになってきています。コンピュータを使うときに、私達とコンピュータの間を仲介するものをユーザインタフェース(UI)といいます。代表的なUIには、例えばパソコンで使われている、グラフィカルユーザインタフェース(GUI)があります。私達はGUIを使うとき、キーボードから文字を入力し、マウスで位置を指定し、ディスプレイ画面から情報を読み取ります。そ



して、GUIではこれらの装置を単に操るのではなく、画面上に表示されたウィンドウ、アイコン、メニューなどの部品を操作して様々な処理を行います。GUIの普及によってパソコンは使いやすくなりましたが、GUIで十分というわけではありません。例えば携帯電話には、パソコン用のGUIとは異なるUIが求められています。このように今日使われているUIには、どのようなものがあるのでしょうか。そして、それらはどのようにして生まれ、これからどのように発展していくのでしょうか。本講座では、UIの過去と現在を紹介し、その未来を展望しました。

(広報普及課)

第8回：2007年2月14日(水)

最適化 ～ものごとを効率的に行うには～

国立情報学研究所 情報学プリンシプル研究系 助教授

宇野 毅明 (うの たけあき)

1989年3月 東京学芸大学附属高等学校 卒業
 1993年3月 東京工業大学理学部情報科学科 卒業
 1995年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻 修了
 1998年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻
 博士課程 修了、博士(理学)を取得
 1998年 東京工業大学システム科学専攻 博士(理学)を取得
 1998年 東京工業大学経営工学専攻 助手 就任
 2001年 国立情報学研究所 助教授 就任
 現在に至る

【専門分野】 数値計画、離散アルゴリズム、データ構造、組合せ最適化



一般にIT技術による効率化というと、記憶・計算・検索などのコンピュータの得意な作業を電子化することを指すことが多いものです。しかし、コンピュータによる効率化は電子化だけではないのです。例えば車のナビゲーションシステムは、道路のデータを電子化しただけではなく、人間に代わって最も短い経路を見つける仕組みを持っています。このような仕組みは、電子化を行えばすぐにできるわけではありません。いくら速いコンピュータでも、無限に存在する経路を全て調べれば無限の時間がかかるのです。人間は直感的に物事を観察し、

良さそうな経路を見つけ出すことができますが、コンピュータには直感的な作業はできません。人間もデータが巨大になると直感的に扱うことはできなくなり、なんらかの自動的な方法が必要になります。このような、自動的に最も良い解を見つける方法のことを最適化といいます。最適化は産業・行政・教育・生活などあらゆる場面で使える基礎技術です。本講座では、この最適化に関して、どのような場面で使われるか、どのようなことができるのか、どのような技術が使われているのか、といった点を中心に解説しました。

(広報普及課)

企業との共同研究における情報の取扱い

産学連携の共同研究では、大学共同利用機関の未公開の先端技術情報や企業情報が参加者で共有されるため、共同研究契約において秘密保持義務が定められています。企業は、中長期戦略の中で新技術導入によるマーケット開拓等も含む研究開発体制、計画等を秘密情報として扱うため、大学共同利用機関でも技術情報以外に秘密情報と指定された情報も厳しく管理する必要があります。例えば、管理体制が不十分なために生じた秘密情報の漏洩がある場合や、事前の了承なく研究内容が公表された場合、損害賠償の問題が生じる可能性があります。さらに、不正の目的が潜む場合は、不正競争防止法による刑事罰を課される可能性もあり注意を要します。

知的財産本部は、上記事項について対応策が十分でない場合を想定し、企業との共同研究をしている研究現場に出向き、少人数での説明会を随時開催しています。ご希望のプロジェクトは、知的財産本部にご相談ください。なお、事例等は、「大学における営業秘密管理指針作成のためのガイドライン」平成16年4月(平成18年5月改訂)経済産業省

http://www.meti.go.jp/policy/innovation_corp/tlo2/0600608himitu-sisin.pdf

で解説されていますので、参考にしてください。

連絡先 03-4212-2125 chizai_web@nii.ac.jp

(知的財産本部)

NII 掲示板

受賞

佐藤一郎教授が2007 IEEE International Symposium on Applications and the Internet (SAINT'2007) Best Paper Awardを受賞
佐藤一郎教授が発表した以下の論文に対し、2007 IEEE International Symposium on Applications and the Internet (SAINT'2007) Best Paper Awardが授与されました。

Ichiro Satoh: "A Component Framework for Document-centric Network Processing"

本位田真一教授がACM Recognition of Service Awardを受賞

河原林健一助教授がThe Organizing Committee of ISAAC 2006 presents the Best Paper Awardを受賞

17th International Symposium on Algorithms and Computation (ISAAC-2006)において河原林健一助教授が発表した以下の論文に対し、The Organizing Committee of ISAAC 2006 presents the Best Paper Awardが授与されました。

Erik Demaine, MohammadTaghi Hajiaghayi and Ken-ichi Kawarabayashi. Algorithmic Graph Minor Theory: Improved Grid Minor Bounds and Wagner's Contraction

本位田教授に平成18年度 情報処理学会フェローの称号が授与されました

情報処理学会フェローは、情報処理および情報通信等の分野で学術的または産業的發展・普及・振興などに著しい貢献をした人に贈られるものです。対象業績:「オブジェクト指向技術ならびにエージェント技術の研究開発と普及に対する貢献」 本位田真一(アーキテクチャ科学研究系 教授)

報道発表

※所属・役職は発表当時のものです。

全国大学の安全・安心な連携のための最先端学術情報基盤の構築に向けて—大学間連携のための全国共同電子認証基盤(UPKI)の共通仕様の公開—

2月26日 曾根原登 情報社会相関系教授、岡田仁志 社会相関研究系助教授 他

Web 2.0に向けた新たな情報検索技術の研究を開始—「Yahoo!知恵袋」の研究利用による情報アクセスの新展開—

3月6日 東倉洋一 教授、大山敬三 情報社会相関系教授 他

「分子に触れて力を感じる」体験型化学教材「HaptiChem(ハプティケム)」を公開

3月15日 佐藤寛子 情報学プリンシプル研究系助教授



表紙解説

日本語バイオポータルJabion

飛躍的に日々発展する生物学において、その情報は各サイトに散漫しており目的とする情報を得るにはかなりの労力と時間を費やします。本サイトは、先端のゲノム情報から専門用語の解説にいたるまで幅広いユーザのニーズに合わせて、生物学に関する情報を提供しています。

コンテンツ内の「ゲノムビューア」では複数のサイトのゲノムデータベースを統合的かつ迅速に検索でき、専門家にとっては強力なアイテムとなることでしょう。また、「論文検索」や「用語辞書」では、日本語のオントロジー構築を組み入れることによって一般レベルに分かりやすさを提供し、正しい専門用語が日本語で理解できるようにしています。日本語バイオポータルJabionは日本の科学リテラシー向上に向け、生物学総合検索のトップサイトを目指して生物学情報を提供しています。



国立情報学研究所の研究・事業活動について詳しくはホームページもご覧ください。

▶ <http://www.nii.ac.jp/>

国立情報学研究所ニュース 第35号 (平成19年3月)

発行/大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構

国立情報学研究所 National Institute of Informatics

国立情報学研究所ニュースに関するお問い合わせは広報普及課 企画・広報係まで

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 学術総合センター

TEL: 03-4212-2135 E-mail: kouhou@nii.ac.jp